



【対談】 安保法国会から見えてきたもの

## 自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

内田 樹さん  
(思想家)

石川康宏さん  
(神戸女学院大学教授)



### 危機感の深さ、広がり

石川 先日お会いしたのは、ヨドバシカメラ前(大阪駅北口)でのSEALDsの街宣の時でした。

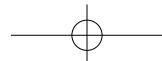
内田 そうでしたね。

石川 マイクを握って街宣カーに乗っている姿を初めて見せてもらいましたが、周りから「声が聞こえない」といわれましたね(笑い)。

内田 遠くから「聞こえませーん」ってね(笑い)。

石川 自分はこういうところへ出てくるような人間じゃないといいながら、ただ今はそうしなければいけないと思っていると、そんな話を最初にされましたよね。そう思われたきっかけのようなどころからお話いただけますか。

内田 安倍政権というのは僕の知る限り戦後最悪の政権です。ふつうなら通るはずのない劣悪で亡国的な政策が次々と現実化してしまっただけでも出来の悪い政治家、邪悪な政治家はいましたけれど、ここまでしたい放題のことをした政治家は戦後日本にはなかった。ある一線を完全に超えてしまった。日本立憲政治の統治システムはもうかなりの部分が壊れてしまっただけで、だから、これまでの経験則は安倍政権には適用できないと思います。



例えば安全保障。歴代内閣の憲法解釈にもずいぶん無理はあったけれど、それでもなんとか法文や判例と辻褃を合わせてきた。でも、今回内閣法制局は完全に内閣に従属しましたね。司法府と立法院の威信がここまで下がったのも前代未聞です。

それが全部、同時に起きた。日本の戦後政治のレジームが文字通りあとひと押しで瓦解するところまで来ている。これまでも僕なりに言論を通じてずいぶん警鐘を乱打してきたつもりだったけど、そんなもの何の役にも立っていない。このままだとほんとに日本は亡びるという感じがしています。来年あたりにはもう「対テロ戦争」に巻き込まれて、そのとき日本国民の相当数は参戦を歓呼の声で迎えるんじゃないかという恐怖がある。だから、とにかく使える手立ては何でも使って何とかして、どんな勢力とも結託して、戦争に向かうのを止めないといけない。そのためには日常生活をある程度犠牲にしてもやるしかない、という気にな

ったわけです。

石川 危機感をもっている人の幅が広いですよ。安保法案に反対する学者の会」があれだけ頑張りましたが、学者がこんなにたくさんで社会運動に取り組むのはめずらしいことです。各大学に「有志の会」を、という呼びかけがあったとき、ぼくは、うち（神戸女学院大学）ではムリかなと思っていました。でも念のためにと「学者の会」の賛同署名を検索すると学内から15名も署名をしていたんです。それで改めてみんなに声をかけて、結果的には、よびかけ人に全学科の教員が名前

## イデオロギー政党になった自民党

内田 出てきましたね。ぼくは65年生きてるけど、日本の政治がここまで限界を超えて劣化しているのを見たのはじめてです。60年安保、60年代終わりの頃の全国学園闘争、ベトナム反戦闘争、過激派のテロとか、いろんなことを見聞してきたけれど、どの時代と

を連ねた「安保法案に反対する神戸女学院有志の会」ができました。会のメンバーでカンパを出し合って、代表を2回東京にも派遣しています。ぼくが思っていたよりも、危機感はずっと強く、広く浸透していました。

内田 強いですね。

石川 全国の「学者の会」は強行採決が行われた直後に、法案に反対する会から法に反対する会への衣替えをしましたが、うちの「会」もそうしようと思いついて、一昨日かな、ようやく合意ができたところです。

比べても、政権がここまでひどいことになったのはないと思う。

自民党ってこんな政党じゃなかったでしょ？ イデオロギー的政党として明確な政治綱領を掲げるといふよりも、「国民政党」として、国民の全階層からのそれなりのリアルな欲求を汲み

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

上げて、とにかく生活水準を上げていくことを最優先する政党だった。外交的には「対米従属を通じての対米独立」戦略を採用して、アメリカに面従腹背しつつ、いつか実利を取ると四苦八苦していた。従属することによって独立するという戦略の欺瞞性が、若いときは非常に不愉快だった。自民党は国民意識が変わるたびに世論に追随して変化する鶴めえのような政党ですから、なんと見識のない政党かと思っていたんです。でも、年をとってくると、こういう形でしか政権与党はあり得ないのかなと思うようになりました。

今の自民党はかつての自民党とはもうまったく違う政党ですよ。過激なイデオロギー政党になってしまった。官邸の対米従属路線を財界と極右勢力が支えている。対米従属さえしておけば、長期政権が保持できるということがわかってきた。だから、官邸は国民の具体的な生活実感にはもう何の関心もないでしょう。

今の自民党には50年、100年先を

見越した国家戦略なんかありません。今の自民党がつくりたがっている体制は、ジョージ・ジョーウエルの『1984年』に描かれているような、完全なデイストピアです。アベノミクスだの「新3本の矢」だの、あんな空疎な政策を恥ずかしげもなく掲げていることが驚きだし、それを支持している人が有権者の50%近くいることがさらに驚きです。政治の劣化以上に、日本国民の政治意識の劣化が多くの予想を超えた速度で進行している。そのことに愕然としているんです。

石川 「構造改革」路線が前面に出てくると、日本会議などが結成されて、自民党トップの右翼化が急速に進むのが同時期なんですよ。そこは90年代日本の政治と社会の大きな特徴です。

小泉流「構造改革」の前には橋本内閣による六大「構造改革」がありました。90年前後の「社会主義」崩壊をきっかけに、アメリカは自国の軍事・経済利益を優先するアメリカン・グ

ローバリゼーションを押し進め、これに追従する形で日本の経済や社会のしくみが「構造改革」の名で作られかえられてきました。89・90年の日米構造協議あたりからでしょうが、しかし、当時は10年で430兆円の公共事業を実施せよといった政策が、社会・経済ルールのアメリカ化である「規制緩和・改革」の要求と併存していました。それが、90年代後半には財政赤字の拡大もあって、大型公共事業を縮小させていきます。

他方で、同時期の93年に「慰安婦」問題を反省した「河野談話」、95年には侵略と植民地支配を反省した「村山談話」が出されますが、これへの逆流として93年に自民党は「歴史・検討委員会」をつくり、95年には『大東亜戦争の総括』という本をまとめます。内容は、学者を先頭に立てて日本人の「歴史認識」をつくり変えようという大号令でした。そして、96年には産経新聞で東京裁判史観は誤りだという、学者を前面に立てたキャンペーンが始めら

れ、97年には日本会議、日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会、新しい歴史教科書をつくる会がつくられました。

六六「構造改革」をかかげた橋本内閣は96年からですが、橋本さんは93年から95年まで日本遺族会の会長で、97年に首相としては中曽根さん以来11年ぶりに靖国神社に参拝します。その後、選挙で負けて「世界一の借金王」を自称しながら大型公共事業を再び拡大しようとした小渕内閣が登場し、小淵さん急死の後に、「日本は神の国」と言い放った森さんが首相になります。その次が小泉内閣です。小泉さんは「規制緩和」や税・社会保障一体改革などを前に出した「構造改革」路線で、トヨタなど製造業・多国籍企業の支援を得、8月15日の靖国参拝を公約に遺族会の支持もとりつけて首相になりました。

内田 基礎をつくったのは小泉純一郎か。

石川 橋本さんぐらいからですかね。

90年代半ばが転換点でしょう。

内田 橋本龍太郎は親中国路線だったでしょう？ ということは、対米従属路線を決定づけたのは小泉内閣からかな。

石川 橋本内閣は96年にクリントン政権とともに「日米安保共同宣言」を行い、ここで日米同盟の守備範囲を「極東」から「アジア・太平洋地域」に飛躍させてきました。ソ連崩壊後のアメリカの軍事戦略への追隨に太い道筋をつけたのは間違いないと思います。しかし、橋本さんは田中角栄の線を継いでいて、地方への配慮もしたし、自民党内に多少は幅のある考え方を認められました。そこが小泉さんたちにつぶされていくわけです。

内田 抵抗勢力……。

石川 ええ、そういうわれて叩きつぶされましたね。

内田 小泉さんが総理になったのは何年だったか。

石川 2001年です。

内田 21世紀か。21世紀に入ってから、この15年間に一気にきたわけだ。

石川 そうですね。そして、森内閣の時に官房副長官だった安倍さんが、小泉内閣でも官房副長官を継続し、2003年には自民党幹事長、05年に官房長官、そして06年に小泉さんが後継指名するような形で首相になるわけです。その第一期安倍内閣の下で、06年に教育基本法が改悪され、07年には改憲に向けた国民投票法がつくられました。しかし、マニフェストの第1項目に「新憲法制定」を掲げた07年の参院選で大敗し、安倍さんは政権を放棄します。その後は、福田内閣、麻生内閣と急速な凋落の道でした。

内田 政権交代があつたのですね。3年8か月、民主党の政権があつた。にもかかわらず流れを止めることができなかつた。民主党はなぜ失敗したのか、その総括がきちんとできていないですね。

石川 規制緩和を中心とした「構造改革」路線では、民主党は自民党とあまり違った路線を打ち出すことができません。



【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

## 総括されずにきた政権交代

せんでしたから。部分的な手直しの範囲ですね。それでも、「コンクリートから人へ」という魅力的なスローガンも

あって、有権者は民主党を熱狂的に支持しました。

内田 鳩山内閣の発足時の内閣支持率は80%ぐらいでしたでしょ。

009年に政権を失った時より、200万票以上も少ないものでした。

石川 すごかったですね。しかし、その後は実績がともなわず、1年かからず失速してしまいます。沖繩の基地問題での鳩山さんの右往左往が象徴的でした。

内田 得票は減りつづけているにもかかわらず議席数はどんどん増えている。

内田 官僚とメディアの集中攻撃がありましたからね。

石川 そうですね。小選挙区制で。内田 棄権が増えているということかな。

石川 基地ではアメリカからも。それで菅さんに交代して……。

石川 民主党政権への期待が裏切られて、その後、投票率は大きく下がりました。政治そのものへの失望の現われでしょうね。

内田 気の毒といえば気の毒だけど、あれほど統治能力の低い人が首相のときに、3・11の大震災、原発事故が起きたから。

内田 野党を結集するような軸になる政党がないってことなのかな。

石川 その後の野田内閣をへて、2012年の選挙で安倍自民党が復活します。しかし、比例代表での得票数は2

石川 これまでと違う政治を訴えて、広く同意を得ることのできる政党がないということでしょうね。有権者は棄権・白票を増やす他に、選挙のたびに

投票先を大きく変えていきもしました。10年にはみんなの党に800万票、それがダメだと12年に維新に1200万票、そして維新もダメだと最近では共産党に移るといった具合です。

内田 ほんとに浮動票なんだね。

石川 模索してるんでしょうね。

内田 浮動票が自民党にいくってことはあるのかな？

石川 政権転落時の得票を回復したことは1度もないですから、投票しなくなった人も含めて、それはいやだと思ってるんでしょうね。

内田 民主党に行つて、みんなの党に行つて、維新に行つて、共産党に行つた浮動票が改めて自民党にいくってことはないよね。「藁をも掴む」っていうのは、よほど自民党を掴みたくないからいくわけだから。共産党を「藁」と言つては石川さんに悪いけど（笑い）。

石川 いえ、まずは藁からでも（笑い）。



石川康宏(いしかわやすひろ)  
 1957年生まれ、経済理論  
 神戸女学院大学教授。著書に『人間の復興か、資本の論理か』3・11後の日本(自治体研究社)、『マルクスのかじり方』(新日本出版社)、『社会のしくみのかじり方』(同)、『21歳が見たフクシマとヒロシマ』(ゼミ編著、同)、内田樹との共著『若者よ、マルクスを読もう1・2』(かもがわ出版)、『軍事立国への野望』(共、同)など。

## アメリカの文法で語られる日本の国益

内田 安倍政権の登場の歴史的條件は多過ぎて、単一の理由には還元できない気がする。反知性主義というのものの文明的なトレンドのなかで出てきたものですね。

一つには、アメリカが「世界の警察官」として全部の紛争をコントロールするということができなくなったので、これまでやっていた仕事をなるべく同盟国に押しつけようとしていること。アーミテージ(元米国務副長官)の

レポートを読むと、「汚れ仕事」を日本に押しつけようとする明らかなき意図が読み取れる。「リバランス」では、ゲームぐらいまでフロントラインを下げる計画なのかもしれない。そして、代わりに日本をフロントラインに押し出す。

しかし、戦後70年、アメリカの命令で動くことしかしてこなかった日本の側には、前線に押し出されても、そこで何をしていいかわからないでしょ

う。そもそも自前で国防戦略とか外交戦略を考えたことがないんですから。それに、いくら自前の安全保障政策を考え出したって、アメリカの許諾が得られなければ実行できない。権限がないことには責任もない。アメリカが必ずOKするような政策だけを起案して、それを差し出してきた。

沖繩がそのいい例です。沖繩に米軍基地を存続させることを求めているのは実際にはアメリカではなく、日本政府です。「お願いだから出ていかななくてくれ」って日本がアメリカに縋っている。アメリカがステイクホルダーとして日本領土内に基地を持っていくれるなら、日本がどこかに攻撃されたときに自動的にそれが米軍への攻撃になり、アメリカはいきなり当事国になる。だから、どうすればいいか、全部アメリカが決めてくれる。

でも、沖繩から米軍がいなくなってしまうたら、仮に偶発的な軍事衝突がどこかで起きた場合でも、アメリカは出てこない可能性がある。安保条約は

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性



内田 樹（うちだ・たつる）  
 1950年生まれ、思想家、倫理学者、武道家、神戸女学院大学名誉教授。著書に「意地悪」化する日本（福島瑞穂との共著、岩波書店）、「日本の反知性主義」（共、晶文社）、「日本戦後史論」（白井聡との共著、徳間書店）、「街場の戦争論」（ミシマ社）、「昭和のエートス」（バジリコ）、「日本辺境論」（新潮新書）、「困難な成熟」（夜間飛行）など。

日本領土内に適用が限定されていますから、領海外でのトラブルについては、アメリカが「それは日本の問題であって、アメリカは関知しない」と言ってくる可能性がある。日本政府はそれを恐れているんだと思います。

ぼくが今アメリカの国務省の役人だったら、沖縄の基地はそろそろ撤回するタイミングじゃないでしょうかと上司に具申しますね。たしかに、気候はいいし、風光明媚だし、コストは全部日本が負担してくれる、夢のような海外基地ですけど、他国の領土を自己都合で70年も占領し続けていることには国際社会に申し開きできるような道

義的正統性がない。それに基地の存在は今やあきらかに沖縄の経済発展を阻害しています。県民の反基地運動もかつてなく高まっている。アメリカは反基地運動が高まっているところからは撤回するというのがこれまでのルールなんです。フィリピンでも韓国でもそうしてきた。それに、米中関係がある程度安定してきたら、海兵隊が沖縄にいる軍略上の必要はない。だから、アメリカ側から見たら、沖縄の基地撤去は「メリットとデメリットどちらが多いか」にかかわる計量的問題に過ぎない。

ところが、日本の外務省も防衛省も

「お願いだから立ち去らないでくれ」とアメリカに縋り付いている。これは日本だけで自前で東アジアの安全保障政策を立案実行する力がないということを告白しているに等しい。70年間アメリカの指示に唯々諾々として従ってきただけなので、日本の国益のために何をすればいいかわからない。

現に、アメリカからの要望を効率的に現実化することに長けた人物が政治家でも官僚でもメディアでも学術の世界でも出世してきた。そういう「アメリカにとってのイエスマン」によって現代日本の指導層は占拠されている。

学術の世界もそうですね。日本の政治学者は、石川さんも知ってると思うけど、ほとんどが学位をアメリカで取ってくる。でも、アメリカの政治学は中立な学問じゃない。アメリカの国益を最大化するためにはどうしたらいいかを考えるための実践的なツールです。だから、アメリカの国益を最大化するために何をなすべきかという問いに満点の答案を書き続けて学位を得た

人たちが日本に帰って来ても、それ以外に頭の使い方を知らないのは当然なんです。そういう政治学者たちが教壇に立ち、メディアで発信し、政策決定に関与している。

彼らの中では「アメリカと日本の国益が相反した場合には、アメリカの国益を取る」という判断がもう自動化していると思います。だって、そういう人間じゃないと、日本の指導的地位に立てないように戦後日本の仕組みは設計されているんですから。だから、日本は21世紀の国際社会でどのような責務を果たしたらいいのか、日本国民が平和で安全に生きていくために何をすればいいのかを、50年、100年というロングスパンで語れる人が日本の指導層にはもういない。アメリカが生き延びるためには何をすればいいかを訊かれたらいくらでもべらべらしゃべるでしょうけど。

この間の安保法制で自民党は衆参で460人議員がいるのに、反対した人は一人もいませんでした。国論を二分

するような論点なのに、党内議論がなかった。これは戦後70年間で前代未聞の事態です。それは「安保法制はアメリカの要求だ」という一喝で、議員全員が縮み上がったからです。官邸に楯突くだけならまだしも、アメリカに楯突くような気概のある人間はもう自民党の国会議員にはいません。

日本という国の構造が土台から壊れ、別のものに変わりつつある。しかし、どのようなものになるうとしていくのかはまだ分からない。主観的にはグローバル資本主義のシステムに最適化し、アメリカの世界戦略の役に立ち、自分たちの支持団体が喜ぶような政策を採択するという個別的な動機は分かるけれども、メカニズム総体としてどこに向かっていくのか、それが僕にはぜんぜん見えない。

石川 第一期の安倍政権は「構造改革」、日米同盟、復古主義の強まりの中で誕生しましたが、あの時には、あまりに急激な復古と改憲の動きに、財界人からも強い反発が出されました。

小泉内閣時代に安倍さんは、中国との経済交流を重視する財界人に向かって「日本の伝統を金で売るのか」と凄みましたよね。それから「慰安婦」問題など東アジア政策ではアメリカからの強い圧力にも直面しました。

そこから彼なりに教訓を引き出したところがありますね。12年からの第二期安倍政権は「歴史認識」では国内外で二枚舌を使ってアメリカやアジアをなるべく刺激せず、財界との関係もゴルフや会食でつなぎとめ、他方でメディアには統制を強めます。

しかし、その背後で、政権転落翌年の2010年に自民党は綱領を一段と右翼的につくり直してもいます。新綱領の前文には「日本らしい日本の保守主義を政治理念として再出発したい」とありますが、この「保守主義」は従来の幅の広い保守ではなく復古主義、靖国史観を意味していました。ここで自民党中枢は「保守から右翼へ」一歩ずれて、閣僚たちも同じ歴史認識の「お友だち」限定となり、それ以外の人

【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

は周辺に押し出されるようになりまし  
た。さらに12年に発表された改憲案で  
自民党は、天皇を憲法尊重義務さえも  
たない元首とし、その体制を子々孫々  
まで残すために改憲を行うと述べてい  
きます。

## 右派イデオロギーが推進する対米従属

内田 戦前の皇国史観を肯定し、大東  
亜戦争を肯定するというイデオロギー  
が今や自民党公認のものになりつつあ  
る。でも、それはポツダム宣言、東京  
裁判、サンフランシスコ講和条約のス  
キームを否定することですから、アメ  
リカとしては本来なら許すわけにはゆ  
かない。でも、アメリカはプラグマテ  
ィックな国ですから、価値観的には許  
容しがたい考えを持っている政府であ  
っても、その政府がアメリカの国益を  
最優先に配慮してくれると約束するな  
ら、認めるにやぶさかではない。そし  
て、日本は現にそうしているわけで  
す。アメリカに過大なサービスをする

この転換によって自民党は、財界の  
求めもアメリカの求めも何でも受け入  
れ、その支持を逆手にとって社会全体  
の右翼化を達成するという、どの方向  
に向けても暴走する政治になったよう  
に思います。

のと引き替えに、民主主義を捨て、憲  
法を捨て、立憲主義を捨てるといふ非  
アメリカ的な政治行動についてアメリ  
カからの「お墨付き」をもらおうとし  
ている。沖縄基地問題もそうですし、  
今回のTPPもそうです。いずれも日  
本の国民資源をアメリカに売り渡すよ  
うなふるまいなのだけれど、アメリカ  
としては自国の国益をこれほど優先し  
てくれる政府であれば支持せざるを得  
ない。だから、日本政府は、日本国民  
を見捨てても、アメリカの国益をはか  
る。アメリカの支持さえ取り付けれ  
ば、政権基盤は盤石だと知っているか  
ら。

石川 暴走の新しい推進力ですね。  
沖縄の基地問題でも、アメリカのため  
に役立つ私たちというのを卑屈にア  
ピールしつづけているように思えま  
す。

内田 アメリカとのパイプがある人間  
だけが出世できるキャリアパスを完成  
させてしまったから、このあとアメリ  
カが離れていって、「日本のことはもう  
知らんよ。自分たちで自己決定しなさい」と言われたら、彼らにしてみたら、  
社会的立場が失われてしまう。だから、  
必死になってアメリカに縋り付い  
ているわけです。「欲しいものは何で  
も差し上げますから、日本の後見人で  
あり続けてください」と懇願している。  
石川 第一期の安倍政権のときには復  
古主義にブレーキをかける財界人もい  
たのですが、今の経団連にはそういう  
人が見当たりません。財界が大局を捉  
えられなくなってきたという問題  
ですね。暴走は大目に見るから、アベ  
ノミクスはしつかりやってくれといっ  
た、本当に目の前のことしか見られな



い団体になってきていますね。

内田 法人税減税で企業の利益を優先させ、若者の雇用環境はどこまでも切り下げられている。こんなことを続けたら、人口減に拍車がかかり、いずれ国内市場が縮小することがわかっていながら、誰も止めない。たしかに今企業は空前の利益を上げていますけれど、その恩恵に浴している人々なんて国民のほんの一握りの富裕層だけです。

石川 軍事大国化で儲けようという財界の動きも目立ってきてますね。10月に発足した防衛装備庁は、武器開発から輸出までを政府が一元的に管理して、軍需産業を育てようとするお役所です。最大の軍需企業である三菱重工からは、早くも軍事部門強化への意欲が示されています。これがまた軍事化や復古主義を加速する要因になりますから、怖いですね。

内田 軍事大国化はその通りですけど、それは政治的幻想よりも、「とりあえず目先の金」ということだと思いま

すよ。戦争で経済を回してゆこうとしている。

兵器というのはただの商品じゃないですから。兵器というのは他の兵器を破壊することを主務とする。自動車や町を走っていて、他の自動車を次々と破壊してゆくということはありえないけれど、兵器は使用されるたびに他の兵器を破壊し、兵器に対する新たな需要を創り出す。そういう意味で、兵器は資本主義経済にとって「夢の商品」なんです。ふつうは商品が市場に回ればどこかで需要は飽和するはずだけれど、兵器だけは違う。市場に回れば出回るほど、市場から商品が消えてゆくんですからね。永久機関みたいなものです。だから、成長の限界に達したグローバル資本主義が最終的に兵器製造と戦争の恒常化をめざすのは論理的には必然なんです。

戦争は社会のインフラを破壊します。でも、人間はライフラインがなければ生きて行けない。だから、破壊されても破壊されても、瓦礫の中からイ

ンフラを作り直す。上下水道を通し、電気を通し、線路を通し、通信網を通し、病院を作り、学校を作る。いくら破壊されても、人間が集団的に生き延びようとしたら、そういうものはゼロから全部作り直さなければならぬ。これはビッグビジネスなわけです。戦争は破壊するときにも金儲けができるけれど、破壊された社会を再生させるときにも金儲けができる。だから、まったく人情というものを持ち合わせない、ひたすら合理的に思考するビジネスマンだったら、「戦争が永遠に続くといい」と言い出すに決まっている。自分が住んでいる辺りが戦場になったり、自分の住んでいる街でテロがあったりしては困るが、そのリスクを差し引いても、世界の半分ぐらいのところの間断なく戦争が起きているのが経済的にはメリットがある、そう計算するでしょう。

石川 軍需は税金で確実に儲けられますね。

内田 政府がいきなり「トヨタのクラ

【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

## 戦争へのハードル

ウンを百万台買います」といったら、国民は「何に使うんだ。日産じゃいけないのか」とか、いろいろ文句を言われますけれど、「戦闘機や戦車を買いま

す」という場合には、「国民のみなさんの命を守るためです」という大義名分がある。

石川 税金への寄生ですね。

内田 日本のメーカーが利益拡大を求めて兵器産業に向うことには、この

た。

善し悪しは措いても、論理的な必然性だと思えます。でも、その動きがそのまま日本が自分から戦争を起こすことにつながるとは思わない。その間にはかなりのハードルがあると思う。最大の理由は正義名分がないことです。今の政府が対外侵略を正当化する理屈を考え出して、それに国民感情が統一されるということにはむずかしい。前の戦争の場合は、なんだかんだいいながら、「五族協和」とか「八紘一宇」とか「大東亜共栄圏」とか、東アジア全域を欧米列強の植民地支配から解放してゆくとしような「政治的に正しい言説」があって、戦争拡大を合理化してい

た。そして、その「アジア同胞とともに欧米列強をアジアから放逐する」というアイディアはつとに幕末の高杉晋作や坂本龍馬の時から延々と語られ続けて来たわけです。だから、日本人にとっては耳慣れたものだったし、それゆえ反対することがきわめてむずかしいものだった。

でも、今の日本の右翼のイデオロギーの中に、「中国や韓国・朝鮮の同胞たちとともに欧米列強と戦おう」なんて言ってる人はひとりもないでしょう？ むしろ彼らにとつて主たる敵は中国や韓国であるわけです。でも、「あいつらは嫌いだ」という程度の幼児的嫌悪感が戦争を駆動するようなス

ケールの理論に結実するということは無理です。

ぼくの父親の世代だと、「支那には四億の民が待つ」なんてうそぶきながら満州に渡って行ったわけです。「アジアはひとつ」というのは、父の世代だと身体的実感としてあったわけです。「アジアの解放」というのは、そういうグラスルーツの実感としてはそれなりの厚みがあった。それがイデオロギーとしてそれなりに強固だったのは、その根本に善意なり、アジア同胞への親密感のようなものがあったからだと思います。でも、今の日本人はそんなアジアに対する善意なんて全然ない。親密感もない。日本がこれから戦争するとしたら、領土を確保したいとか、中国に一泡吹かせたいとか、金儲けできそうだからとかいう貧しい動機しかあり得ない。それが本音であったとしても、恥ずかしくて、そんなことを国際社会に向けては訴えられない。それで日本国民の愛国的情熱を掻き立てることもむずかしいでしょう。

## 【特集】暴走・安倍政権を包囲する希望

アメリカでも、フランスでも、イスラム諸国でも、戦争をする国は大義名分を語ります。でも、今の日本に、国際社会に向かつて「これから戦争を始めます」というときにどんな大義名分がありますか。戦前の日本なら、それなりに国民を信じ込ませ、国際社会に訴える言い分があった。今の日本にはそんなものがありません。あるとしたら「テロリストに日本人が殺された。復讐だ」というような情念的な煽りだけ。だから、安倍政権は本心では日本人が海外でイスラムのテロリストにどんなに殺されることを切望していると思いますよ。それ以外に「戦争をしよう」という国民世論を喚起するチャンスはないんですから。

でも、そういう「きっかけ」がないと兵器産業で金儲けをするというレベルから軍事国家化のレベルまでの「テイクオフ」は簡単には果たせないと思います。

石川 安倍政権は武器輸出三原則を完全になくしましたよね。種子島からロ

ケットを飛ばす宇宙開発にも軍事利用への道を開いたし、大学に公然と軍事研究を呼びかけるようになっていきます。いかにも一挙にという感じですね。兵器生産については、アメリカやイギリス、フランスなどから共同生産のはたらきかけもあり、日本経団連は何度かミッションを送ってそれぞれと交流もしています。そのあたりは『軍

## 「戦争できる国」をつくって何をしたいのか

内田 ISが相手でも、迂回できるから兵器を売るんじゃないですか。パレスチナにもイスラエルにも両方に売る。「ダミー会社を噛ませれば日本の責任は問われませんよ」と儲け話を持ちかけられたら、日本の兵器産業は喜んで武器を売ると思いますよ。

軍国主義的な国家をつくりたいというの、安倍さんの年来の願望だということとは分かる。でも、何のために、どこと戦争するか、それについては何のヴィジョンもない。「戦争ができる

事立国への野望』かもがわ出版）に紹介しましたが、政権が「死の商人」の成長に道を開きながら、戦争のできる国づくりを進めているわけです。他方で、財界の側も「構造改革」推進の中で、儲けのためなら何をやってもいいというモラルの自壊を進めてきたように思いますね。

国」になりたいということだけが自己目的化している。軍事力行使を通じて世界にどのような秩序なり、理想なりを実現しようとするのかについては一言もない。ただ、アメリカのお役に立つなら、というのと、それで経済が潤うならということだけ。それよりも、戦時体制になれば独裁政体で作れるから、それが主な狙いではないんですか。非常事態法を採択して、憲法を停止して、議会を閉じて、反政府的なメディアをつぶし、反体制的な言論人は

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

全部「非国民」として投獄できる。そういう仕組みはできるだけ早く実現したい。独裁体制を完成させるための口実として戦争やテロは非常に役に立ちますから。

安倍政権の恐ろしさは、「戦争ができる国」にして、「戦時体制を作り上げる」ところまではかなり狡猾にプランを練っているのだけれど、その体制で何をしたいのが完全に空白になってることで。イデオロギーの筋目からいったら、その後は「アメリカと戦争する」以外に選択肢はないわけですから……。

石川 それはできないですよ。

内田 口にするわけにもいかない。ペリー来航以来、日本はアメリカの東アジア植民地化戦略の中にあり、戦後には実際に植民地化されていたわけだから、日本人がイデオロギー的には反米であるのが当然なんです。でも、それは口にするだけでも、意識化することも、禁じられている。でも、情念のレベルでは、親米派も含めて、全員が無

意識的には反米であるのは当たり前なんです。箸の上げ下ろしまで宗主国に指示されている植民地原住民が宗主国を憎まないはずがない。

その原住民の中でも宗主国にうまく取り入っている連中が今の日本の指導層を形成しているわけだけれど、彼らだって自分が売国的なふるまいによってその立場にあることに心のどこかでは疚しさを感じてはいる。でも、「いつかアメリカと戦って、今度は勝つ」という無意識的な欲望は完全に抑圧されている。そのような欲望を持っているということ自体が国民的レベルで否認されている。

しかし、沖縄問題に見られるように、日本の国益よりもアメリカの国益を優先させるという政策は、少し遠目から見ればまったく倒錯していることは誰にでもわかります。沖縄を切り捨てるのが、日本の取りうる唯一の合理的な政策選択であると政府が言い張り、メディアや政治学者がそれに追随するという図は、日本人の相当数が集

団的な精神疾患に罹患していると見なす以外に説明できない気がする。

日本人のなかに無意識的にであれ反米のルサンチマン、反米の情念が存在するということは石川君も同意できるでしょう。

石川 そうですね。屈折した形でと自覚的な反米意識と。

内田 過剰な対米従属というの、実は抑圧された反米的情念の症状だと僕は思っている。アメリカに寄り添って、日本を裏切ることによって、日本人の中に反米ルサンチマンがどんどん蓄積している。この間、TPPに関する雑誌の中吊り広告を見てたら、甘利さん（明、内閣府特命担当大臣・経済財政政策）がアメリカ代表を怒鳴りつけたという見出しが誇らしげに掲げてあった。

アメリカの国益を増大するためにやっている議論の場で、アメリカ代表を怒鳴りつけることに快哉を叫ぶというのは、まったく倒錯した行動なわけだけれど、それが「変だ」ということが

## 見たことない抵抗運動

わからない。アメリカに依存し服従することでは自分のポジションを保てないという現実と、自分の上に立つアメリカに対する敵対的な感情がアンビ

バレントなまま同一人物の中に混在している。そういう葛藤が剥き出しの症状として出現してきたのが安倍政権じゃないかという気がします。

石川 かつての侵略を正義の戦争と呼び、東京裁判史観を誤りだという本音をもった政権が世界のどこでも、東京裁判史観を日本に広めた張本人の

子どもの手を引いたママたちの運動があり、弁護士や学者たちの運動も……。

争に参加し、アメリカが認めた国連の軍事活動にも加わっていく。それが今回の安保法制ですものね。歴史認識と外交の倒錯あるいは分裂の中での暴走ですよね。

内田 高校生まで出てきたからね。45年ぶりぐらい(笑い)。石川 T's S O W Lです。この間、学習会に呼ばれて行ってきたんですが、みんないい子たちで、ほんとに抱きしめたくなくなるくらい(笑い)。

ところで、内田先生は明後日も安保法廃止をよびかける街頭に立たれるんですよね。

内田 えらいよねえ。昔の反戦高連とか反戦高協なんかには抱きしめたくなるようなやつなんかいなかったもの(笑い)。

内田 今週と来週の週末はSEALDs KANSAIとセツシオンをやります。

石川 ほんとに目がキラキラして、一所懸命考えていました。今の社会を少しでもよくしたいと真剣に。

石川 若い人たちの運動があり、若い

内田 上の世代は日本が植民地だとい

う事実をどうしても認められないという病気があれど、二十代から下にはそれがなくて、割とストレートに「日本ってアメリカの属国でしょ?」と言おうと「そうすね」と言う。「経済成長なんて、もうしないよね?」と言うと「そうすね」と言うし、「グローバル資本主義ってもう終わりでしょう?」と言おうと「そうすね」って言う。彼らは生活実感、身体実感として、

これから後日本が経済成長していくとか、中国を追い抜いて「東アジアの盟主」になれるなんて思っていない。日本がアメリカの属国だということとは否定しようのない事実として感じている。いかなれば、日本って「泥水」みたいなものでしょう。それを「これは泥水じゃない清水だ」と言い張っている連中がいるけれど、若い世代は、泥水のなかで生まれて、そこで普通に呼吸している。彼らは別に「これは清水だ」というような嘘をつく必要はない。「泥水」にちゃんと適応しているから。だから、彼らの主張はきわめて現実



## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

的なものになる。

昔の学生運動や市民運動はもつと理想主義的でしたよね。安保法制反対だったら、反原発、沖繩基地撤去、消費税増税反対……とどんどん綱領的要求が増えてゆく。そうやって「達成しなければならぬ政治的課題」をどんどん増やしていったら、結果的には、その全部に賛同できない市民を切り捨て、その全部を達成できない自らの組織に「使い物にならない組織」という烙印を捺してしまった。

ロジカルにはそっちの方が正しそうに見えるんだけど、SEALDsはもつと現実的でしたね。彼らは「戦争法案反対」の一点での国民の結集を求めた。他の政策については意見の違う人たちとでも、この一点では共闘できる点に絞り込んだ。これは賢い選択だったと思います。

安保法制反対の人の中にも、法案には賛成だけれど、手続きが乱暴すぎるからという理由で反対している人もいるわけで、そういう人たちも引き入れ

ていった。

石川 素直な常識が入口ですね。内田 彼らは理想をめざしているわけじゃないんだと思います。彼らの育ってきた「泥水的」社会のなかにもそれなりの条理があったし、それなりの楽しさもあつた。彼らはそれを守りたいんだと思います。その秩序が乱されていることに対して不安を感じ、怒りを感じているんだと思う。

戦後70年間、日本は何か辻褃を合わせながらやってきた。例えば、9条がありながら自衛隊が存在するこの状態について、僕らはその矛盾にずっと苦しんできたわけだけど、彼らはそれをもう苦しんでいない。常態として受け入れて育ってきている。そうすると自己欺瞞がない。集団的自衛権はダメだけど、個別的自衛権は認められて当然ということとは矛盾じゃなくて、常識になつていて。

今の社会の仕組みをとりあえず受け入れた上で、それでも「自分たちは戦争に行きたくない、人を殺したくない、

い、グローバル企業が収益を上げるために自分の人生を犠牲にしたくない、独裁的な政体で暮らしたくない」というごくリアルな主張を掲げたところがユニークだったんです。

石川 10年ぐらい前に、若い人の運動で少し目立ったものにロスジェネがありました。

内田 そうでしたね。

石川 あのとときは、自分たちの置かれた厳しい境遇を、団塊の世代のせいにするような。

内田 あれはよくなかった。

石川 自分たちが置かれた状況への憤りはわかるけど、そうした状況が生まれる理由への分析は浅薄でしたね。結果的に、権力にとってはとても都合のいい「仲間割れ」を持ち込みました。しかし、そういう運動が大した力を持たずに消えて、今のような運動が急速に立ち上がってくる。

その転換はどうやって行われてきたんでしょうね。

## 自尊感情の維持、クリエイティブな人生

内田 ロスジェネ論というのは生まれ  
た世代によって「いい思いをした人た  
ち」と「いい思いができなかった人た  
ち」がいるのは不公平だから、「いい思  
いをした老人たち」から資源を奪還せ  
よという主張だったでしょ。国民資源  
の公平な分配という主張そのものは正  
しいんだけど、「バブルの頃にさんざ  
に僕にはつよい違和感を覚えた。僕  
は、バブルの頃の、消費活動に狂奔す  
る日本人が見苦しくて、それが厭でた  
まらなかつた。だから、バブル期の繁  
栄が社会の理想のかたちであって、あ  
の時代が羨ましいと思っている人がい  
ることに驚いた。

ただ、今の若い子たちってもうみ  
んなバブル崩壊以降の生まれでしょ。  
ああいう狂躁的な消費活動を見たこと  
も聞いたこともない。生まれてからず  
っと日本は不況で、年を追うごとにど  
んどん貧しくなっていくた。貧しさが  
彼らのデフォルトなんです。  
ロスジェネ世代との一番の違いは、  
誰に対しても特に恨みがあるわけでな  
く、「いい思いをしているやつはそれを  
こっちへよこせ。公平な分配をしろ」  
みたいなことを言わないという点で  
す。誰かが自分の本来の取り分を横取  
りして「いい思い」をしているせいで、  
自分は不幸せになっているなんて思っ  
てない。人間が楽しく暮らすかどうか  
は工夫の問題、生き方の問題、スタイ  
ルの問題であって、物質的なものとは  
あまり関係ないと思っている。だっ  
て、彼らの周りはみんな貧しいから。  
貧しい人間は不幸なんだと思ってい  
たら、やっつけられない。貧しさは彼らに  
とって所与の環境なんです。彼らの生  
きている「泥水」なんです。だから、  
その中でどうやって自尊感情を維持し  
ながらみんなと助け合ってクリエイテ

ィブな人生を送るのか、その方向に頭  
を切り替えられた。  
彼らが立憲主義とか立憲デモクラ  
シーとかいったとき、彼らにとってそ  
れは実に「リアル」なものなんだつた  
と思う。戦後民主主義体制のなかで当  
たり前のように暮らしてきた僕たち世  
代の方がむしろ立憲デモクラシーをリ  
アルに感じていない。空気のようにそ  
こにあったから。でも、こうやって社  
会の仕組みのいろんな虚飾を剥がれて  
ゆくと、結局、70年間戦争をしないで  
きたこと、民主主義的な憲法があっ  
て、三権分立の仕組みが担保されてき  
たこと、そのおかげで戦後日本社会は  
それなりに住みやすい国であったとい  
うことがわかった。だから、お金のあ  
るなしは、もうそれほど優先的なこと  
じゃない。もっと大切なものが壊れよ  
うとしているんだから。彼らが「憲法  
を守れ」というのはもう守るべき最後  
に残ったものがそれだからで、これを  
失ったら、もうおしまいだという切迫  
感があるからだという気がする。

【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

石川 SEALDsはHPでの主張も良くできていますよね。立憲主義とか、生活の保障とか、平和的な外交とか。簡潔だけれどよく練られた主張になっています。同時に、彼らの学者に

## 「学者の会」、SEALDsを可能にしたもの

対する真摯な態度を見てみると、知性に対する敬意をすっかりもっているようにも見えますね。ああいう姿勢ってどこから出てきているんでしょう。

内田 この世に跋扈しているものに対する生物としての反応なんじゃないかな。彼らは何からも守られていない、まる裸でしょう。恐竜に対して、いわば牙も角もない小動物たちが起ち上がっているようなもので。だから、彼らが生き残っていくために一番大事なものは感覚の鋭さ、危険に対する感度でしょう。ものがクリアに見えるとか、遠くの声がはつきり聞こえるとか、腐臭とか屍臭がしたら感じ取れるとか、そういう五感のセンサーが弱い動物にとっては決定的に重要になる。

ことをしない。そうした方が政策的整合性はとれるんだけど、それをやるとみんな考えなくなる。だって、中枢がみんなに代わって考えてくれるから。それでは知性が鈍る。ひとりひとりが自分の頭を使って考え、判断するということをしなくなる。そのことを回避するために、中枢が決定し、その指示に末端が従うという従来の組織論を取らないんだと思う。

その点さえはつきりしていれば、それ以外の論件については、自分の意見を述べて構わない。学者の会には安保法案以外の政治課題については、公式見解とか統一見解というようなものがないから。これがなかなか理解しにくいから、僕のところにも「この点についての学者の会の公式見解はなんですか？」という質問が来たりする。「学者の会は、安保法案反対以外の政治課題については公式見解や統一見解がありません」と答えるとずいぶん驚かれた。「学者の会」のあるメンバーが自分のSNSでこんな発言をしていたが、これは「学者の会」の政治的立場に合わないはずなので除名しろというような意見が出たこともありました。こういうことを言う人は「学者の会」を古いタイプの「あらゆるイシューについて網羅的に統一見解を出せる組織」だと思っているんでしょう。そうじゃないということはなかなか理解しにくい。これはあるいはSEALDsに影響されたのかも知れないです。従来の学

者たちの運動だと、どうしてもあらゆる政治課題について統一見解というものを持たなければいけないという思い込みがある。現に今の日本の政党がそうですよね。SEALDsや「学者の会」はそのちょうど逆の仕組みになっている。全員が自分の意見を自由に語っていい。そのためには、組織を統合する目的というのはミニマムにする、ということですね。でも、それができるためにはメンバーたちの知性と倫理性に対する信頼がないとできない。そういう共通性が「学者の会」とSEALDsの連携を可能にしたんだと思う。

石川 一緒に「慰安婦」問題の解決に向けた取り組みをしている若い人と話していて、「社会科学」という言葉を聞いたことがないといわれて驚かされたことがあるんです。それじゃあ、経済学や政治学、歴史学は何だと思われていたのかと。そこで思い当たったのが、90年代の右翼的な歴史観の台頭でしたね。「愛国者はあつちじゃなくこ

ちの歴史観なんだ」と、社会や歴史についての研究の当否をイデオロギーの問題にすり替えてしまおう。それが、社会科学を主観的な、ものの見方の好みに解消させる大きな役割を果たしたんじゃないかと。社会や歴史の分野への反知性主義の導入ですね。そういう反知性主義に足をすえた政治の危険性に対する反感が、知性への敬意を回復させるきっかけになっているようにも思います。

SEALDsの本が二冊出てるでしょう（『高橋源一郎×SEALDs 民主主義ってなんだ？』、『SEALDs 民主主義ってこれだ！』）。リーダー格の学生たちが話し合っているのを読むと、総じてよく勉強してますよね。個々人それぞれの学びですが、それが右翼のイデオロギッシュなものへの壁になっているような。

内田 あるね。イデオロギーに対する嫌悪感というよりも、それだと身体がうまく動かない、イデオロギーに染まると生物として弱くなるということ

が直感的に分かるんじゃないかな。  
石川 未来を語ることに必要を熱く語っているところには、学者に対する批判もありましたね。学者は現状がなぜこうであるかの説明には熱心だが、それをどう変えていくかを語る人は多くないって。なるほどなと思わされました。

内田 過去については後知恵で「こうなると思っていた」といくらでも言える。でも、「これからこうなる」っていう未来予測は当たり外れがすぐ分かるからなかなか言えない。僕はじゃんじやん予言をするんだけど、それは当たり外れがはっきりわかるからなんだ。それに基づいて自分の思考回路を点検する。結構打率悪くないんだよ（笑）。でも、ふつうの学者は「これからこうなる」っていうことを非常に自制するね。それは学術的厳密さに対する気づかいというより、誤答することを恐れているからだと思う。  
石川 そうですね。自己規制が強いですね。

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

内田 受験秀才が多いから。秀才は誤答するくらいなら黙っている方を選ぶでしょ。

石川 組織論の問題では、上智大学の中野晃一さんが敷き布団と掛け布団と解説したのが面白かったですね。憲法を守ろう、憲法が実現する社会をつくろうと戦後70年間努力をつづけた人がある。その人たちが言わば敷き布団で、そこに、今回の緊急事態のなかでSEALDsやママの会などの掛け布団が出てきたと。中野さんは、夏は敷き布団だけで寝ていられるけど、冬は掛け布団がないと寝られないと（笑い）。

内田 それはすごく分かりやすいな。

石川 その両方がうまくかみあっている。

内田 世代を超えてるとい感じはする。

石川 敷き布団の側も、掛け布団がない短期間にここまで成功したのかということについては真摯に考える必要がありますね。自分たちの組織論、運動論について。

内田 敷き布団は敷き布団だからね、掛け布団にしようとしても……。

石川 SEALDs、KANSAIの中心にいるある学生に、一番気をつけていることは何かと聞いたら、「見せ方」「見られ方」だと即答されました。正しいことを言っていれば今に多数になるといった悠長なことではなく、パッと見たときにたくさんの人が「あれは何だ、かっこいい」と思っている人が寄ってこないとダメだということなんです。そこは敷き布団の運動とはだいぶ違うと思います。

## クリスマスチャンがフロントラインに立つとき

内田 ぼくが興味深く思っているのは、クリスマスチャンの比率が高いことですね。東京で中心になったのは明治学院とICU。関西では同志社、関西学院が多い。神戸女学院もメンバーを出しているでしょ。奥田君はお父さんが牧師さんだし、SEALDs、KANSAIの大野君も野間君も神学部。クリスマス教が日本で社会運動のフロントライ

ました。

内田 違うね。ある意味できわめてポリティカルだよな。

石川 LINE（無料の通話・メールアプリ）で頻繁に連絡をとりながら、時々、十三じゅうさんに集まっているそうです。ある学生のお父さんがお店の二階を貸してくれて。うちの学生もいますが、多くの授業ではよく寝てますね（笑い）。LINEにだけは反応していますけど（笑い）。

内田 戦後はなかったんじゃないかな。戦前には救貧活動とか、セツルメントとか、救世軍とか賀川豊彦の生協運動とかキリスト教徒が深くコミットした市民運動はあったけれど、豊か

内田 戦後はなかったんじゃないかな。戦前には救貧活動とか、セツルメントとか、救世軍とか賀川豊彦の生協運動とかキリスト教徒が深くコミットした市民運動はあったけれど、豊か

内田 戦後はなかったんじゃないかな。戦前には救貧活動とか、セツルメントとか、救世軍とか賀川豊彦の生協運動とかキリスト教徒が深くコミットした市民運動はあったけれど、豊か



平和な時代になるとキリスト教はあまり出番がなかった。でも、今は格差が拡大して、雇用環境も底なしに劣化して、若者にとって貧困の問題はほんとうにリアルになってきた。だから、貧者、社会的弱者に対する支援をどう組織するか急務に感じられるようになったんじゃないかな。世俗的な栄誉とか名声、富裕というものを求めないところもそうだよ。禁欲とまでいわないけど、物質的なものに対する欲望が希薄で。そういう運動はバブル期なんかには出て来るはずがない。仏教の方からも同じような若者の運動が出て来てもよかつたんだけど、なぜかキリスト教の文化的環境から出て来た。そしてSEALDsって、「修道士的」といいいいほど自己抑制的ですよね。

罵詈雑言を投げつけられても決して罵詈雑言では対応しない。面白かったのは、京都のデモで、円山公園から出て南座の前に来たとき。「今公演時間中なので、コールの声を出しませんが、よろしく願います」と言っていて、

南座の前を無言で通り過ぎて、四条大橋を渡ってからまたコールを始めた。南座でやっていたのは松竹新喜劇だったんだけど、昔の学生運動だったら、自分たちは緊急の政治的な課題を担ってデモをやっているんだから、なんで喜劇鑑賞のためにシユブレヒコールを自制しなきゃいけないんだということにきつくなったと思う。でも、SEALDsは自分たちには言いたいことがあるけれど、南座に楽しみに来ている人の邪魔はしたくないからといって、無言で通るという気遣いを示した。僕はこれを見たときに、僕が知っているこれまでの政治運動とは全く違うものが生まれたなと思った。

本来、政治というのは節度がないこと、抑制を外すことで大きな突破力を発揮してきたでしょ。橋下徹の政治手法がまさにそうだったけれど、市民的常識とか配慮とかいうものを蹴散らすことで大衆的な人気を集めた。でも、SEALDsはそのまったく反対の、抑制をきかせ、節度を保つことが、今

の政治的状況下ではむしろインパクトがあることを示した。

石川 宣伝カーの周りの交通整理もきちんとしますものね。行人の邪魔には絶対ならないようにと。

内田 70年にデモに行ったとき驚いたのは、党派の連中って、切符も買わないで地下鉄にゾロゾロ乗るんですよ。おでんやの屋台に首突っ込んで、勝手におでん食っちゃうやつまでいた。自分たちは政治的に正しいことをしているのだから、市民は自分たちにサービスするべきだと思っていたんだろうね。でも、そういう数を持ってんだらう活を踏みにじるようなことをしていたら決して支持は集まらないよ。でも、その頃の学生運動には、自分たちは政治的前衛であり、市民を指導する立場なのだと思いがつた特権意識があった。今の運動にはそういうものがまったくない。そこがぼくには衝撃的だったな。

あと、うちのおふくろがテレビを見て、「何でプラカードの文字が全部英語

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

なの」って文句を言ったから、「母さん、あれは世界に向けてアピールしてるんだよ。『安倍政治を許すな』って日本語で書いたら日本人しか読めないけど、

## 自立したものの同士信頼、連帯感

石川 組織性も高く、それぞれの役割分担がはっきりしている。街宣では

タイムキーパーが時間をしっかり管理していて、宣伝カーの上にはMCがいて、その他に音楽担当の学生がいて、さらにビデオ撮影の学生がいたりします。ぼくも喋らせてもらって、下に降りたらツイッター担当だという学生がこれでいいですかとスマホの画面を見せてくる。いいよと言ったら、その場で送信です。見事な分業です。そして行動を終えたら周辺を片付けて、「じゃあね」とみんな地下鉄へ。

内田 すごいね。

石川 個人の自律性もあって、自律したものの同士の信頼感とか連帯感があって、それでいて過剰に群れないんです

英語だとニュース映像が配信されたら、世界中の人が、ああ日本の若者はそう思っているんだとアピールできるでしょ」と言ったら、納得してました。

よね。群れて遊ぶ時間はなかったかも知れないけれど。

内田 非中核的な組織だからね。組織は大きくなると必ず管理部門が中枢に坐り、そこに権限も情報もお金も集まり、そこだけが自己肥大化してゆくとしょ。そうやって組織は活力を失ってゆく。だから、SEALDsは賢いと思う。大きなサイズの、中央集権的な組織にしないで、小さい組織が自立的に日本中に分散している。奥田くんは「戦争法案反対」というワンイシューの組織だから、来年の参院選までやって、そこで解散すると宣言したけど、他の地方のSEALDsはどうするか、それはたぶんそれぞれが決めるんだと思う。賢いよ。

石川 さっきの本の座談会を読んでいると、ずつとつづけるのは疲弊する。だから1回止めて、またもう一度始めたいという話が出てきます。学生の運動だから、どっどん人が入れ代わるのは当たり前なんです。上級生が卒業してもまた違うやり方で誰かが始めるだろうと。自分たちが脱けていくことに恐さを感じていないんですね。だから、戦後70年間戦争がなくて平和だねっていられるのと同じように、戦後100年も大丈夫。だって誰かがやってくれるはずだからと、周りの人たち、後輩たちへの信頼感があるんですね。

「学者の会」の事務局長の佐藤学さんが、自分たち一人ひとりが「学者の会」だと言われた時、ぼくもこれはSEALDsに学んだところだなと思いましたよ。

内田 そうだね。

石川 8月末に「学者の会」の「100大学有志の共同行動」に参加した時に聞いた上野千鶴子さんの発言も印象

的でした。学者というのは群れないものだ、お互いに顔を見ればお前は間違っていると言う、そういう人種がこの狭い部屋に250人も同席している、これは一体どういうことか(笑)。一つは、それほどまでに、今の日本社会の危機は深いということだ、もう一つは、その危機を乗り越えるための学者たちの決意がかたいということだと。この発言には満場の拍手が送られました。

そういう意志を「学者の会」は見事に集めましたよね。だから、ほんとに一人ひとりが自分たちの創意で動いている。内田先生の12月19日の講演の場は、大阪市大の学者の会が関西のあちこちの会に呼びかけて、横のネットワークをつくろうと取り組んでくれたものです。もちろんうちのメンバーからも参加します。それぞれが誰にいわれるでもなく、自分たちが主人公になって進んでいる。こういう運動の力はすごいですね。

内田 大学はもつと危機感をもっていると思う。この数年間、大学に対する教

育行政の圧力はひたすら管理強化していくだけで、このままでは大学は死ぬ

## 政党は民意の入れ物

内田 これからどうなるかな……。まずは参院選ですよ。参院選までにある程度野党の協力体制ができるかどうか。民主党は解党した方が野党連携は進むかもしれない。大阪の維新と、民主党から離党した新自由主義者一派が自民党の補完勢力になる。民主党が残った方が共産党、社民、生活と組んで選挙協力する。そういうかたちになるんじゃないかな。

石川 維新も、現執行部は共産党の政権提案などには乗れないという姿勢でしょうけど、安保法案を廃案に追い込もうという運動の高まりの中で、最後は維新も国会前に出てきて、野党5党が手をつながざるを得なくなりましたよね。あの局面では、民主党の前原さんとか細野さんとかも表立ってはもの言えない状態になりました。ですか

よ。

ら、政党・政治家にどういう行動をとらせるのかは、市民の運動に大きくかかっていると思います。政党指導部よりも市民の運動じゃないでしょうか。

内田 そういう気がしますね。

石川 その点は、SEALDsの奥田くんが、政府とか政党っていうのは民意の入れ物なんだ、民意は自分たちがつくるんだといっているのがピタリくると思います。それだけに、政府の側からは運動に亀裂を入れる試みも強くなるでしょうが。

内田 自民党としては野党勢力を二分割して弱体化させたいから、なんとかしてそういう方向に動くんじゃないかな。ただ、どっちにしても選挙で自民・公明は票を減らすでしょう。次の選挙は「安保法案に賛成した議員を落選させる運動」になると、当選しそ

## 【対談】自立する市民、澆刺たる学生、輝く知性

な野党候補に票を集めるといふ格好になる。好き嫌いは有権者の主観の問題だけれど、野党候補の中では相対的に誰が当選可能性が高いかを判定するのは客観的で計量的な問題なので、「当選してほしい候補に入れるのではなく、当選してほしくない候補を落とす」ということになる、有権者の投票行動はずいぶん変化すると思う。

石川 もう一つ、今回の運動が日本の未来に大きな可能性を開いたと思うのは、立憲主義という言葉を広めたことですね。政治権力は憲法で縛られていて、どんな政党が政権に就こうと、憲法を実現するための政治を目指すのが当然のルールなんだということが「常識」化しつつある。

今回は9条の限りですが、25条は生存権、26条は教育権となっている。金がないから学校へ行けないとか、奨学金がただのローンになってるのはおかしくないかとか、メシも食えないような低賃金は、27・28条の労働権に照らしおかしくないかとか、立憲主義と

いう言葉と考え方の広がり、9条以外のさまざまな問題についても新しい運動の可能性を切り拓いている。それが安倍政権のひどきを平和問題以外の分野でもひろくあぶり出すための追い風になると思います。

内田 憲法というのは政府を撃つするというのが本来の役割だということのはつきりしたんじゃないかな。憲法を破るために安倍政権がどれくらい悪あがしたのを見たときに、逆に憲法というのはそれだけ強いものだということに国民は気がついたんじゃないかな。憲法がきちんと機能している限り、誰も憲法のことなんか考えない。憲法が何の役に立っているかなんか考えもしない。それが、ここまで憲法が踏みにじられると、はじめて憲法を持っている力に気づく。99条の憲法順守義務は公務員だけに課せられていて、一般国民が公務員に向って憲法を守ることを命じているという憲法のロジックを今回はじめて知った人も多んじゃないかな。

石川 圧倒的多数がそうだと思います。そこまで市民社会の水準を引き上げたSEALDsや「学者の会」、ママの会などの歴史的な役割はとても大きい。

内田 だけど、少数の青年たちにこれから先もずっと頑張つてねと仕事を押しつけることは申し訳ないね。これをもっといろいろな運動につなげていくしかないという気がする。直近の課題は来年の参院選で何とかして自公の過半数を崩していく、改憲ができない仕組みをつくるのが最優先課題でしょう。

石川 何とか頑張りたいですね。

(2015年11月12日、於：神戸市・凱風館)  
(写真撮影・後藤 清)

## 読者会

(どなたでも参加可)

テーマ…特集「暴走・安部政権を包囲する希望」をめぐって  
日時…2016年2月4日(木) 午後2時  
場所…アカデミー文京  
(東京・文京シビックセンター地階  
地下鉄「後楽園」春日」下車すぐ)